

愉快な一期一会

荒井正行

17年前の話になります。私が29歳になった年にアメリカへ渡りました。最近では、短期語学留学として半年あるいは1年間海外研修をする学生が増えて、就職前にすでに海外滞在を経験する機会を得ているようです。これは、大変素晴らしいことだと思います。しかし、数十年前の私にはそのようなことは考えられないことでした。ましてや海外旅行でさえも想像が付きませんでした。旅行といえば国内のとある田舎へ電車でゆっくりと旅をする。どこへ行くか、どんな風景が待ち構えているのか、そのような事を想像するだけでも私にとっては刺激的なことだったのです。アメリカへ渡航する前までに国外出張したのは、計3回程度だったと思います。それも旅行としてではなく、仕事すなわち学会出張として。はじめての国外出張が26歳の時。実験データをまとめて英国の機械学会でその結果を報告しました。はじめて取得したパスポートとお金を腹巻に入れて、成田空港へ向かいました。ヒースロー空港に到着し、パスポートコントロールで黒人女性に捲し立てられて英語で質問され、何を話しているのかさっぱり分からなかった。なんとかホテルに到着し、発表原稿を何度も読み返しては緊張したのを今でもはっきりと覚えています。原稿を丸覚えしたので25分間よどみなく英語で発表できました。ところがこれが悪かった！こいつは英語が話せるのかと、方々で手が上がり質問攻めに合いました。このときに発表した内容は、電子顕微鏡により耐熱鋼が高温でどのように損傷していくのか詳細に観察したものでした（これは私の学位論文のテーマとなりました）。そのころ、英国、フランスでは損傷力学と呼ばれる新しい力学を構築することが進められており、私が観察した結果が彼らの理論の実験的検証を与えるのではないかとの思惑もあって発表後も質問にあいました。その当時、質問された内容がほとんどわからず情けない気持ちになり帰国しました。ここで一言。帰国後も随分としつこく(?)質問の手紙を頂き、丁寧に英文で返答しました。彼らは興味深い研究成果に対しては語学を超えてその本質を知りたいという知的好奇心に富んでいる人種なのですね。

29歳になって突然上司から「3ヶ月後にアメリカの研究所へ行って勉強するように。」と言われました。5月上旬の出来事だったと思います。何を研究するのも知らずに。ちょうど子供も生まれており、不安が一杯だったのではと思われるでしょうが、出国準備、残務処理と忙しく、そんな感傷に浸っている暇もありません。最も大きな問題は、そのころ準備していた学位論文を提出し、計2回の学位審査と公聴会を終了させなければならない。このため、先生方に時間の都

合を急遽付けてもらい、すべての審査を終了してもらいました。ところが、今度は学位授与式が出国後に予定されている（9月頃だったと思う）。しかし、これには出席できない！主査が学生時代からの恩師でしたから、「しょうがないから、俺が授与式に出席するよ！」ということで指導教授に私の学位授与式に出席してもらい、学位記を郵送してもらおうという前代未聞を演じることになってしまいました。今でもこの件に関しては申し訳ない気持ちで一杯です。自宅の荷物を段ボールに詰めて当時住んでいた世田谷の自宅からアメリカの研究所へと船便で輸送してもらうことに。荷物が詰め終わったら自宅には最低限の着物しかなく、まだ寒かったので出国までの2週間程度は大変厳しい状況で過ごしていました。

成田空港からダラスフォートワース国際空港、そして彼の地サンアントニオに到着。サンアントニオはテキサス州でも南にあり、冬でも半袖で生活できるほどの気温が高い地域。ここにこれから勤務するサウスウエスト研究所がありました。研究所の敷地は広大で隣の建物まで自動車で移動しなければならないほど。到着初日から2週間程度、空港近くのホテルに滞在することにしました。そして空港近くでレンタカーを借り、翌日から研究所へさっそく出勤。といたいところですが、ハンドルが日本と反対側にある。いざ道路に出てみると、英語の看板に圧倒！ゆっくり考えたいのですが、行きかう自動車のスピードが速いこと。なんとか研究所に自力で到着。守衛さんに「応用物理部に行きたいのだが。」という、これまた英語で捲し立てるように（あたりまえだが）「最近見たことのない顔だが、IDがないと入れるわけにはいかない！」。ボスに連絡を取ってもらうよう伝え、それからかなり時間が経ってからゲートが開いた。所内の道に迷いながらゆっくりと目的地へ。その間、日本とは異なって広大な敷地が目の前に広がっています。そこには、なんとシカの群れが走っていたのです！数十分後、応用物理部に到着。ぽつんと6階建ての建屋とその向かいには工場のような実験室が1棟。出国前に「日本人が一人いるらしい」と聞いていたが、実際には「ヤツは数年前にクビになったよ。」とのこと。数十人の研究者と技術者には一人も日本人がいないことが判明。ボスはジェイと呼ばれていた。MITで核融合の計算をやっていたらしいが、ポジションが見つからずこの研究所に来たこと、ここではマネージャーに徹していること、日本が大好きなこと（毎年日本に出張しているらしい）、などゆっくりと英語で話してくれた。「ここで私は何をやるのですか」と私。「応用力学部の連中が熱疲労試験をやっている。ここでは、いろいろなセンサーを使ってどんな出力が得られるか調べてるんだ。だから小さくて感度の良いセンサーを作るんだよ。」と彼。「私の専門は応用力学部でやられていることに近いのです。センサーのことはよく分かりません。」と私。「……。」と彼。「これから応用力学部のヤツが打ち合わせに来る予定だから。」「はあ。」と

冴えないやり取りが繰り返されるうちに、インド人がやってきた。サストリーという。彼の話していることがまったくわからない。ジェイに「こいつと一緒に仕事をするのか？彼は何語を喋っているのか？」と聞く。ジェイ「立派な英語だよ。」私はさらに暗い気持ちになりました。英語が完璧に聞き取れないのにさらにめちゃくちゃな発音の英語をしゃべるインド人と一緒に仕事をするなんて...

なんとかホテルと研究所の往復を遂げて、アパートにも無事に引っ越しが終了。しかし、なかなか荷物が届かない。それまでアパートには何も無い。船便は荷物が到着するまでに非常に時間がかかるのです。そのことを知りませんでした。しかたなく車で10分ほどのところにある大型スーパーへ買い出しに。

アパートの管理人さんは、日本と異なってミニスカートのピチピチギャルで、なにしろカッコいい。自宅に帰宅すると、アパートにあるプールに水着で寝転んでいる感じの女性。その女性が私に「日本人がこのアパートには住んでいるのよ。」と教えてくれました。その人はその当時、テキサス大学医学部に所属しており、後、熊本大学へ帰国された磯濱先生。何の縁かわかりませんが、私が本学に就任したときに、彼も本学薬学部に就任という巡りあわせとなりました。彼とその奥様にはいろいろとサンアントニオの生活情報を教えていただき助かりました。毎週、彼の部屋と私の部屋とで交互に飲み会をやっていたように記憶します。

生活、仕事上ととにかく困ったのが英語でした。周りとうまく話が通じず、コイツは相当頭がワルイやつだな、と思われていたのではないのでしょうか。そんなわけで、私がとった行動は毎日昼食2時間たっぷり取って、マクドナルド→バーガーキング→ウエンディーズと場所を変えつつ、会計のやりとり、周りの会話に聞き耳をたてて、とにかく喋っていた言葉をそのまま丸暗記するというやり方を1か月間ほど続けました。その後夕方になると、いそいそとジェイの秘書のところに行き、そのときに暗記した内容を話すことから始め、自分のこと、日本のことなどなんでもいいから話すことを続けました。はじめは「ドクターに教えることはありません。そういう立場ではありませんから。」と嫌がっていましたが、だんだん話している内容に対して「それは女性がいう言い方です。」「紳士が言う言葉ではありません。」「このように話した方がいいでしょう。」など会話に指摘が加わるようになりました。途中からはレポート、論文の添削もやってもらい、彼女は私の英語の先生となりました。周りに日本人がいなかったお蔭で、英語で考え、英語を話さざる負えない環境は、私を大きく成長させることになったと思います。私が帰国する際には「アメリカはあなたの第二の祖国です。アメリカに戻ったら必ず私に連絡してほしい。」と言っただけのほどになりました。

時間が経つにつれてインド人の話している英語もわかるようになり、暇を見つけては彼と研究の話ができるまでになりました。彼から応用力学部門に所属

する研究員を紹介され、人の輪が広がりました。彼との話のなかから帰国後、いつかは研究テーマとして立ち上げたものもあります。今、みなさんに渡しているテーマのいくつかも彼との会話のなかから生まれたものもあるのですよ。インド人ことサストリーから私の部屋に電話がかかりました。彼曰く「いいところを紹介するからメシを食いに行こう。今からオレの車をアライのところに持っていくから。ビルの前で待ってろ。」と。建物の前で待っていると、フロントガラスが砕け散った黒のボロシビックが近づいてきます。私の心「まさか!」。彼「や〜。待ってた。隣乗れよ。」乗車するとさっそくサストリーが「俺は日本が好きだ。だからシビックに乗っている。いい車だろ。」私「あ〜。いい車だね。夏の暑い日には最高だ。」と全面から流入する強風が顔面に当たりつつの困惑顔。想像通りインド料理店へつれていかれました。サストリー「何がいい」。私「よくわからない」。サストリー「せっかくきたから俺が好きなのを頼むよ」。私「オッケー」。やってきた料理は無論カレー。インド人が好きとあって本当に辛く、日本流に残しては失礼とばかりにすべて平らげました。これが午後你的生活レベルを著しく低下させることになります。時毎に唸りくる腹痛。トイレと部屋との絶え間ない往復が開始されました。帰国後、何度かインドへの出張の機会がありましたが、この記憶が頭の底に沈殿しているためか全てお断りしています。

実験が暇な時間は理論をやり始めました。マックスウエルの方程式をいじり始めたのです。はじめに着手した問題は、半無限体の単純なものでした。久しぶりにベッセル関数があらわれて嬉しくなったのを思い出します。軸対称問題にはハンケル変換とよばれる積分変換をすると偏微分方程式がうまく解けるのですが、途中の式に含まれる無限積分を計算しなければ答えが得られない。しかし、この無限積分が計算できない。私がジェイに「今、ヒマなときにこんな問題を解いているのです。」ジェイ「ん... オレも昔はそういうのをMITでやらされていたが、今は興味がない。2年前にココをやめた理論屋がいる。そいつに後で電話しとく。ヤツは今ヒマだから大喜びするだろう。」数日後、テキサスハットをかぶったジーパン姿のお爺さんがやってきた。「やあ。君が何か世の中の役に立たないことに興味をもっているヤツか。」私「そういわれると困ります。」彼「なんか要か。」私「この無限積分ができないんです。」私の机の上に乗るかかり彼「答えはこんな感じかな。」私「どうやって解いたのですか。ずいぶんいい加減な式にも見えます。」彼「アメリカ人は答えを想像するのさ。その答えが結局この式の数値解に一致してりゃいいんだろ。それで皆ハッピーだよ。」私「それもそうですね。」何日かかけて一人で関数の組み合わせを見つけ出す作業に取り掛かりました。そうするうちに無限積分の数値解に一致するような関数の組み合わせが見つかり、その老人に見せました。彼「やりや〜できるだろ」。私「疲れましたが、どうもそのようですね。」それから少しして彼とは数値積分方程式に関し

てちょっとした成果を出したと記憶しています。彼が「オマエ、応用数学学会で発表したら？」私「実験が忙しいのです。それに私は数学が専門じゃありません」。彼「え！そうなの。じゃ～、俺が発表してもいいか？」私「どうぞ」。帰国後知ったことですが、電磁場の数値解析の分野で随分名の知られた先生だったようです。

数学の調べ物をするために図書館にもよく通いました。そのうち図書館秘書の女性と知り合いになりました。彼女があるとき、「あなた日本人？ちょっと見てもらいたいものがあるのよ」。私は誘われるままに部屋に伺い、扉を開けると日本語で書かれた美術書、百科事典が机の上にどっさり置かれていました。私「どうしたのですか」。秘書「この理事長が日本好きで、古書を購入したのですが、どれが何の本か知りたい、と言うのです。この研究所にひとり日本人がいたはずだから、彼に訳すように伝えてくれないか。と言われました。それは可能でしょうか？」私「昔の本に使われている字、すなわち漢字は今の私たちには読みにくい複雑な形状をしているのです。しかし、やってみましょう。」それから、図書館に行き、調べ物が終わると日本語で書かれた本に目を通し、目録のようなものを作りました。結構な労働となりましたが、最後に理事長に呼ばれてお食事を招待していただきました。この理事長はオイルマンで、笑うと奥には金歯、すべての指には金の指輪がはめ込まれ、完全なテキサスイングリッシュを操る生粋のテキサスっ子であることがわかりました。ちょっと品がありませんね。

滞米半年程度で英会話はほとんど理解できるようになり、テレビのニュースにも耳を傾け、夢も英語で、という状態に達したと思います。そうになると、アメリカ人、メキシコ人、中国人、韓国人と人種を問わず、人間そのものに興味を抱くようになりました。とにかく話していることが楽しいのです。軽快なテンポのもとで相手とやりとりする、とにかく人間が楽しかった。半年経ってから、ジェイに「学会に行きたい」と伝えると、ジェイが「どこへ行きたいのだ」。私「カリフォルニアで米国機械学会の総会がある。そこに行って、アメリカの最近の研究を調査したい。」ジェイ「どのくらい行くつもりだ」。私「最低3週間は行きたい」。ジェイ「何しに行く」。私「仕事だ」。ジェイ「だから、本当は何しに行く」。私「遊びたい」。ジェイ「わかった」。といったやりとりの果て、テキサスからようやく出られるようになりました。

旅費を安くするため早朝便を予約しました。これが後々アダになるとは。出発当日、目を覚ますとフライト30分前。あわてて家族を起こし、空港へ車を飛ばす。チケットセンター到着とともに飛行機は空の彼方へ。私「すみません。」担当女性「どうしました。」私「朝、子供が熱を出し、その対応に追われました。」女性「お～マイゴット。かわいそうな人たちよ。ちょっとまって。」と言われ数分後、段ボールみたいなプラカードには「かわいそうな人たち。○○便 席を譲

れる方、彼らに譲ってやってください！」と書かれていました。彼女「とにかくそこにクビからプラカードをぶら下げて立ってて頂戴。あとは私がなんとかするから。」アメリカ流のお節介が始まりました。3 時間後に「席を譲っていただける方が見つかりました。このチケットで至急、この便に乗ってください。」私「サンキュー」。というわけで3 時間遅れでしたがカリフォルニアへ旅立つことができました。空港でレンタカーを借り、一路モーターへ。ホテルは宿泊費が高いのです。翌日、妻と子供をディズニーランドへ連れていき、その後、私は学会会場へ移動。夕方、ディズニーランドへ向かいに行く。これを数日繰り返しました。学会が閉会しても私たちは車でいろいろなところを移動し、サンフランシスコ、ヨセミテ、ラスベガス、グランドキャニオンといろいろ足を運びました。本当に楽しかった。研究所に戻ると早速ジェイのところへ挨拶。私「昨日の夜戻りました。今日から仕事頑張ります。」ジェイ「顔が黒いが...」。私「日焼けしました」。ジェイ「どこへ行った」。あとは私の旅程についてすべて話をすると、ジェイは「君の部屋は変わった」。私「どこですか」。ジェイ「今まで窓側にあった君の部屋は今日から通路側になる」。私「あ〜そうですか。わかりました。」これでふっきれ、3 か月に1 度は自動車で自宅からシカゴ、フロリダなど様々な場所に旅行へ行くようになりました。ただし、旅行中は研究ノートを持ち運び、夜になると計算をやっていたことを思い出します。結果がでると、メールでジェイには報告していました。

1 年たってアパートが手狭に感じられ、もう少し広いところに引っ越すことを考えていろいろと物件を探し始めました。研究所から約 30 分北にある住宅街に手ごろな一戸建てを見つけ、そこを借りることにしました。敷地 200 坪で緑に囲まれその真ん中にちょこんと平屋建ての木造が建っていました。ガレージも車 2 台駐車できるだけのスペースがありました。そのころには車を 2 台所有していました。いわゆるピカピカのアメ車です。また、近所にはこのコミュニティーのための専用プールもありました。1 か月 15 万円だったと思います。この物件を見つけ出すときもちょっとした悶着がありました。車でふらふらと移動しているときにかわいい建屋のリアルエステート（不動産屋）を見つけました。私「一戸建てを探しています。」社長「おまえは中国人か？」私「いいえ。日本人です。」社長「今はどうしている。」私「アパートに住んでいます。」社長「じゃ〜、そこでいいじゃないか。」私「子供が暴れまわって下の住人からクレームがきました。管理人さんから出ていけと言われていたのです。」社長「そうか。それなら君にいい物件がある。ちょっと見に行かないか。」私「イエス」。その後、車で 30 分行ったところにその家がありました。ちょっとした住宅街でした。一目見て「グレート。ここを借りたい。」と伝えると、社長が「私もほっとした。ここらへんの住人は何しろうるさい人が多い。隣人には気を使うこと。このあた

りにはアジア人は居ないからな。挨拶はしろよ。」家族がこの一戸建てに引っ越し、翌朝社長に言われていたことに従って自宅前を掃除していると、前に住んでいる人が「グッドモーニング！」と声を掛ける。びっくりして見てみると、なんとこの家を紹介してくれた社長ではないか。私「何故、あなたがここに？」社長「ここはオレの家だ。オマエのようなヤツはオレの家の前に住まわせて監視しときゃ安心だ。なんかあったら家のワイフに言ってくれ。」その後、公私ともに社長、この奥さんにはお世話になり、私の子供を自分の孫のようにかわいがり面倒をいつも見てくれました。そして、帰国のときには涙ながらに別れを告げた、という関係にまでなりました。

まだまだこのアメリカ滞在記には書きたいことが山ほどあります。時間があつたら皆さんとお酒を飲みながら話をしましょう。あまり文章が長くなるとよくありませんね。ただし、タイトルにもあるように人生はまさに“一期一会”と言えましょう。人間は一人で生きているわけではありません。様々な方たちに支えられ、それらの方々との接触を経て自分が精神成長していくのではないのでしょうか。今ある私は、多くの人たちとの触れ合いを経てあるのだ、と強く感じています。

私がこれまでに周りからしてもらったように、少しでも皆さんの成長過程に今度は私が関与できればと思っています。

今年一年、楽しく皆でがんばりましょう。